

海外インターンシップと事前研修が 日本人英語学習者に与える英語学習の 動機・英語能力試験への影響

東京都／東京工業高等専門学校一般教育科 専任講師 檜村 真由

概要

本研究は、高等専門学校における海外インターンシップとその事前事後学習が、海外インターンシップおよび本調査に参加した学生の英語学習・使用の態度およびモチベーション、英語運用能力試験、英語運用能力の自己評価に与える影響を検証したものである。本調査には、学生の英語学習・使用の態度およびモチベーションを測るために、Gardner の Attitude / Motivation Test Battery に手を加えたリッカート形式のアンケートが、英語運用能力の測定には、TOEIC と同形式の問題が、学生自身の英語運用能力自己評価を測るためには、TOEIC Can-Do List を高等専門学校用に加筆修正した高専版 Can-Do List が使用された。インターンシップ参加前と参加後のデータを統計学的に分析したところ、海外インターンシップ参加者のインターンシップ参加後の英語使用への不安が減少し、英語運用能力試験の達成度向上が見られた。また、学生自身の英語運用能力の自己評価にも改善が見られた。

1 高等教育機関におけるインターンシップ

1.1 高等専門学校におけるインターンシップ

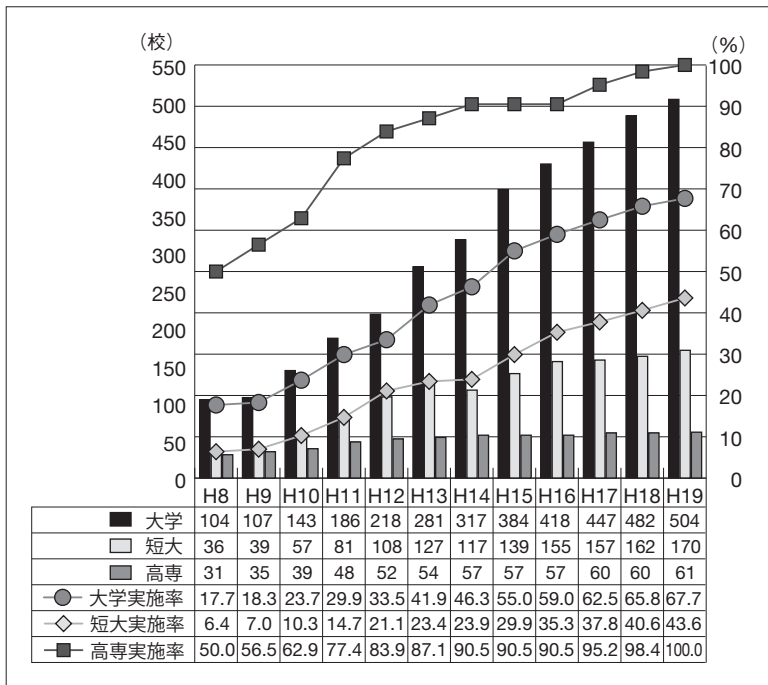
国際化・情報化の進展、産業構造の変化など日本社会経済の変化を背景に、文部省（現 文部科学省）、経済産業省、厚生労働省が連携し、1997年の「経済構造の変革と創造のための行動計画」および「教育改革プログラム」において、高等教育における創造的な人材育成の一環として、インターンシップを総

合的に推進することとなった^(注1)。その結果、近年では、大学・短期大学（以下、短大）でのキャリア教育の中核的な取り組みとしてインターンシップが急速な広がりを見せている（千葉, 2010, p.207）。

文部科学省では、1996年度から高等教育機関（大学、短大、高専専門学校）において、授業科目として実施されているインターンシップの実施状況を調査している。図1は2008年4月の調査報告に掲載された「実施校・実施率の推移」を示す。このグラフによれば、文部科学省が調査を始めた1996年度（H8）の段階で、高等専門学校（以下、高専）でのインターンシップ実施率は既に50%となっており、大学（17.7%）、短大（6.4%）と比較すると非常に高く、2007年度（H19）においては、調査への回答を行った全高専で、インターンシップを行っている^(注2)と報告されている。

高専におけるインターンシップ実施率の高さは、各高専に設置されている学科のほとんどが工学系の学科であることその他、高専創設の経緯とその実験・実習重視の教育理念に関連があると言えよう^(注3)。高専は、産業界からの強い要望に応えるため、実践的技術者を養成する高校および短大の学年にわたる5年または5年半の早期専門教育の導入を行う高等教育機関として1962年度に設立された（国立高専機構）。実践的技術者を育成するために、実験・実習重視の教育を行っているため、文部科学省が高等教育機関におけるインターンシップについて調査を行い始めた1996年の段階で、高い水準のインターンシップ実施率であったと考えられる。

21世紀の産業および経済のより一層のグローバル化を背景に、独立行政法人国立高専機構本部（以下、



(注) 文部科学省(2008)「大学等における平成19年度インターンシップ実施状況調査について」概要より引用。

▶ 図1：各高等教育機関におけるインターンシップ実施校・実施率の推移

高専機構とする)主催で、国立高専専攻科生または専攻科への進学が確実な5年生および教職員を対象に、海外インターンシップ・プログラムが2008年から始まった。その他、東京工業高等専門学校をはじめとして、独自のルートで海外インターンシップ先を開拓し、学生たちを派遣している高専もある。

1.2 東京工業高等専門学校におけるインターンシップ実施状況

本稿での調査対象となる東京高等専門学校(以下、東京高専)においては、第1期生から、4年次におけるインターンシップ(当時の名称は夏期実習)を卒業要件の一部として、現在に至るまで、1期生が4年生になった1968年から毎年実施している。現在では、東京高専の準学士課程のインターンシップは、原則として夏季休業中に2週間程度行われている。また、2003年に準学士課程の上に設置された専攻科課程(準学士課程修了の後2年以上在籍し、学位授与機構での審査を経て、学士号を取得可能)においては、専攻科1年次に、必修専門科目として「特別実習」を設置し、1か月以上のインターンシップへの参加および事後報告を課している。

その他、2008年度の高専機構での海外インターン

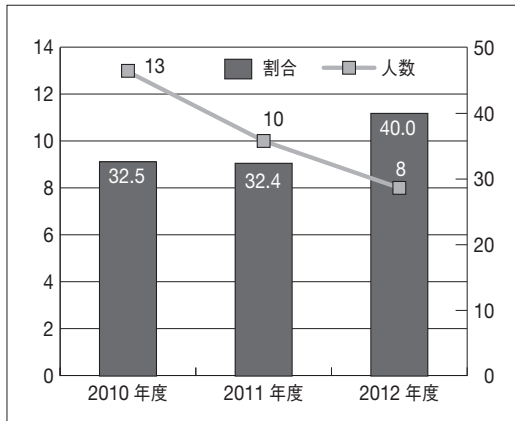
シップの導入を受けて、東京高専では、専攻科1年生の「特別実習」の新たな選択肢として、独自のルートで斡旋を行う海外インターンシップを2010年度から開始した。表1は、東京高専が独自の海外インターンシップを設置以降の2010から2012年度の国内・海外インターンシップ参加者内訳である。

■ 表1：インターンシップ国内外参加者数内訳

年度	国内	海外	計
2010年	27名	13名	40名
2011年	21名	10名	31名
2012年	12名	8名	20名

海外インターンシップ参加者数は、3年間であまり変動が見られないように見えるが、専攻科1年生の在籍人数から、海外インターンシップ参加者の割合の推移を見ると(図2参照)、増加傾向であることがわかる。

2010から2012年度の協力企業、派遣国、研修内容、派遣人数を表2にまとめた。派遣先として協力いただいた企業および機関は、いずれも東京高専と関連のある企業・機関である(注4)。



▶ 図2：海外インターンシップ参加者数と年度における割合の推移

■ 表2：独自の海外インターンシップ派遣実績

年度	派遣国	学生の受け入れ協力企業・機関名	人数
2010	中国	江蘇富士通通信技術有限公司	3
		深圳テクノセンター	4
	タイ	Korat Matsushita Co., Ltd.	4
	マレーシア	森発條	2
2011	中国	江蘇富士通通信技術有限公司	3
		深圳テクノセンター	1
	タイ	Korat Matsushita Co., Ltd.	3
	マレーシア	森発條	2
	フィンランド	ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学	1
2012	タイ	Korat Matsushita Co., Ltd.	3
	マレーシア	森発條	2
	ベトナム	キャノン・ベトナム	1
	フィンランド	ヘルシンキ・メトロポリア応用科学大学	2

2 英語学習・使用の態度とモチベーション、英語運用能力試験の達成度の変化の調査

2.1 調査目的

本調査の目的は、東京高専の専攻科生対象の1か月以上の海外インターンシップと事前学習が、彼らの英語学習および英語使用の態度とモチベーション、そして英語運用能力試験の達成度とCan-Do Statementsを用いた自己英語運用能力評価アンケートでの結果に何らかの変化をもたらすのかを探ることである。具体的に、上記の目的を達成するた

めに、以下の4つの質問を立てた。

- 1) 海外インターンシップ参加者（以下、海外組）と国内インターンシップ参加者（以下、国内組）の間に、元来、モチベーション・態度、英語運用能力に違いがあるのか。
- 2) 海外組は、インターンシップ参加前後での英語学習・使用の態度およびモチベーション、英語運用能力試験の達成度に変化があるのか。
- 3) 海外組の海外インターンシップ参加直後と数か月後には、英語学習・使用の態度およびモチベーションに変化があるのか。
- 4) インターンシップ前および後の英語使用や異文化理解に関する学習は、海外組、国内組にどのように受け入れられたのだろうか。

これらについて調査するために、海外組および国内組の学生へのアンケート調査、英語使用に関する2週間分の日記作成、英語運用能力試験を実施し、収集したデータを統計的に分析し、海外インターンシップと事前学習がもたらす英語学習者である調査参加者への変化の有無、また変化があったらどのような変化なのかを分析し、考察した。

2.2 調査参加者

2012年度に専攻科1年生に在籍し、「特別実習」および筆者の担当する「英語演習I」を履修した20名の日本人学生。東京高専専攻科に入学するまでに6か月以上の海外滞在経験がある学生は、年度当初のプロフィール調査によると1名もいなかった。インターンシップ国内外参加者内訳は、表1のとおり国内12名、海外8名であった。

2.3 調査方法

筆者の通年・必修一般科目「英語演習I」の授業（1回90分、通年で30回）において、表3に記す調査、課題および試験を調査参加者20名に実施した。これらの実施した調査、課題、試験で収集したデータを、以下のように検定にかけた。海外組と国内組に元来差異があるのかを測定するために、対応のないt検定を用い、海外組、国内組それぞれの群のインターンシップ前と後の差異を測定するために、対応のあるt検定を用いた。また海外組に関しては、インターンシップ直後とその数か月後の状況に関しても

■ 表 3：調査に用いた質問紙など

資料番号	調査	形式	内容	調査対象者	実施時期
1	高専版 Attitude / Motivation Test Battery	リッカート形式 (5件法)	英語学習者の外国語学習・使用への態度と関心を探る	海外組, 国内組	インターンシップ参加前 (2012年5月), 参加後 (10月), 学年末 (2013年2月)
	TOEIC 模試	4肢択一	英語運用能力試験	海外組, 国内組	インターンシップ参加前 (2012年5月), 参加後 (11月)
2	高専版 TOEIC Can-Do List	リッカート形式 (5件法)	英語運用能力の自己評価	海外組, 国内組	インターンシップ参加前 (2012年4月), 学年末 (2013年2月)
3	英語学習・使用ログ	書式に沿ってインターンシップ参加中もしくは夏休み中2週間について, 自由記述式	英語学習・使用状況の調査	海外組, 国内組	2012年8～9月の任意の2週間
4	事前研修の効果確認質問紙	リッカート形式 (5件法)	world Englishes の概念, 異文化理解に関する研修の効果測定	海外組, 国内組	インターンシップ参加前 (2012年7月), 参加後 (11月), 学年末 (2013年2月)
5	事後学習の効果確認質問紙	リッカート形式 (5件法)	インターンシップでの経験を用いた英語学習・使用および異文化理解に関する学習の効果測定	海外組, 国内組	学年末 (2013年2月)

データを取っていたので, それに関しても対応のある t 検定を用いた。学生の自由記述による英語学習・使用のログ (資料 3) は, 分析の過程での裏づけとして用いることとした。

2.3.1 高専版 Attitude / Motivation Test Battery

英語学習者の外国語学習・使用への態度と関心を探るために, Gardner (2004) の Attitude / Motivation Test Battery をもとに, 高専版 Attitude / Motivation Test Battery を作成した^(注5)。その際, Gardner 自身の日本人用に作られた分類を参照し^(注6), 「外国語への興味」, 「モチベーションの強さ」, 「英語の授業への不安」, 「英語を学習することへの態度」, 「統合的志向性」, 「英語学習の意欲」, 「英語使用への不安」, 「道具的志向性」に分類されていた質問項目から 38 個の質問を抽出した^(注7)。選出した 38 個の質問を筆者がまず日本語に翻訳し, Gardner の原文と拙訳を英語教授法専攻での修士号を持つ 2 名の日本人英語教員に逆翻訳を依頼し, 日本語訳の調整を行った。その 38 個の質問を 5 件法のリッカート形式の質問紙 (1 = 全くそう思わない, 3 = どちらとも言えない, 5 = とてもそう思う) にまとめ, 資料 1 のように完成させた。この質問紙の実施時期は, 表 3 に記

したとおり, インターンシップおよび事前研修前, インターンシップ参加後, 学年末の 3 回で, 海外組, 国内組全 20 名を対象として全員から回答を得た。

2.3.2 TOEIC 模試

調査参加者の英語運用能力試験を測るために, 東京高専において, 外部指標として関連づける語学テストは TOEIC を活用しているため, TOEIC の問題形式の試験を採択した。TOEIC と同じ 4 肢択一で, リスニング問題 100 題, リーディング問題 100 題で, 試験問題には, 第 1 回の試験で, リント社の『TOEIC Test プラス・マガジン』2012年 3 月号掲載 TOEIC 模試を, 第 2 回では, 同社同雑誌の 2012年 11 月号掲載 TOEIC 模試を使用した。試験は, インターンシップ参加前と参加後の 2 回行った。

2.3.3 高専版 TOEIC Can-Do List

学生自身の英語運用能力自己評価のために, 高専版 TOEIC Can-Do List (資料 2) を日本語で作成し, 使用した。作成にあたっては, Educational Testing Service (ETS) (2000) によって TOEIC のスコア解釈のために開発された Can-Do Statements をもととし, それを日本人学生用にアレンジした小山の

「名古屋工業大学 can-do リスト」(小山, 2007) を参考に、高専の学生の状況や彼らが参加するインターンシップで起こりうる状況に沿うよう筆者が質問の加筆修正を行った。カテゴリーは、ETSによる TOEIC Can-Do Statements および小山による「名古屋工業大学 can-do リスト」と同様に Listening, Speaking, Interactive Skills, Reading, Writing の 5 つとし、質問紙の形式は、5 件法のリッカート形式 (1 = 全くできない, 3 = 何とかできる, 5 = 簡単にできる) とした。インターンシップおよびその事前研修を受ける前とインターンシップ参加およびその後の事後学習の後の状況の比較を行うために、実施時期は、年度初めの2012年4月と学年末の2013年2月とした。

2.3.4 英語学習・使用ログ

学生の英語学習・使用状況の調査のために、英語学習・使用ログ(資料3)を作成した。海外組、国内組両群の学生たちは、インターンシップ参加中もしくは参加前、参加後の2012年8月から9月の任意の2週間の英語学習・使用状況を与えられた書式を使って報告するよう筆者から依頼を受けた。海外組の学生には、海外インターンシップにおいて英語を使う機会があるようであれば、積極的に海外インターンシップ期間中の2週間についてのログを付けてもらうように筆者が事前に依頼しておいた。

2.3.5 事前および事後学習の効果確認質問紙

筆者担当であった「英語演習 I」の授業内において、海外組、国内組両群を対象に、英語使用や異文化理解に関する事前学習、事後学習を行った。表4に示すインターンシップ事前学習、事後学習の学生自身が感じた効果を測定するために、事前および事後学習の効果確認質問紙(資料4, 5)を作成した。

■表4：インターンシップ事前および事後学習の内容と時間

時期	内容	時間(分)
4月	1. 世界の英語使用者について	45
	2. world Englishes の概念	
6月	3. 文化とは	45
	4. 異文化同士の衝突に関する読み物をもとにした活動	150
	5. カルチャーショックと異文化許容の過程について	30
7月	6. 事後学習で行うポスタープレゼンテーションのために	20
11月	7. インターンシップに関するポスタープレゼンテーションのためのティップス	45
12月	8. ポスタープレゼンテーション(1授業に10名ずつ)	180
	9. インターンシップでの体験をもとに異文化理解に関する活動	90

(注) 上記4. で使用した教材は、石井英里子(東海大学)から提供を受けた。

3

調査結果と考察

3.1 インターンシップ参加以前の海外組と国内組2群の差異

英語学習・使用の態度とモチベーション、英語運用能力試験、英語運用能力自己評価に関して、インターンシップ参加前に、そもそも海外組と国内組の2群間に差があるかを測定した。

英語学習・使用の態度とモチベーションについて、高専版 Attitude / Motivation Test Battery での各カテゴリー「外国語への興味」、「モチベーションの強さ」、「英語の授業への不安」、「英語を学習することへの態度」、「統合的志向性」、「英語学習の意欲」、「英語使用への不安」、「道具的志向性」の各設問(5問もしくは4問)の加算値を対応のない t 検定を用いて比較した。その結果、「英語使用への不安」のカテゴリーにのみ、5%水準で有意差が見られた ($p = 0.034$)。表5が、海外組と国内組の記述統計の結果である。

表5から、インターンシップ参加前の段階で、海外組、国内組で統計的に有意差の出た「英語使用への不安」に関しては、海外組の方が、英語を使用することに強く不安を抱いていたことがわかる。

英語運用能力試験に関して、第1回の TOEIC 模

■ 表 5：インターンシップ参加前の高専版 Attitude / Motivation Test Battery の結果の記述統計データ

カテゴリー	群	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
外国語への興味	国内	12	17.92	5.28	1.52
	海外	8	19.88	4.42	1.56
モチベーションの強さ	国内	12	12.83	5.32	1.53
	海外	8	12.88	3.72	1.31
英語の授業への不安	国内	12	13.83	3.99	1.15
	海外	8	13.50	5.73	2.02
英語を学習することへの態度	国内	12	14.17	3.68	1.06
	海外	8	13.25	4.46	1.57
統合的志向性	国内	12	15.33	2.67	.77
	海外	8	15.75	3.45	1.22
英語学習への意欲	国内	12	16.50	3.23	.93
	海外	8	14.75	3.73	1.31
英語使用への不安	国内	12	18.08	4.68	1.35
	海外	8	22.25	2.49	.88
道具的志向性	国内	12	14.08	2.61	.75
	海外	8	13.38	4.53	1.60

■ 表 6：TOEIC 模試正答数に関する記述統計データ

試験名	群	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
第1回 TOEIC 模試	国内	12	74.25	9.42	2.72
	海外	8	82.00	26.90	9.51
第2回 TOEIC 模試	国内	12	75.67	10.95	3.16
	海外	8	97.75	22.97	8.12

試リスニング・セクション、リーディング・セクションの合計200問における海外組、国内組の2群の正答数（表6参照）を対応のないt検定で比較したところ、その平均正答数に5%水準で有意差は認められなかった。

また、英語運用能力自己評価に関して、高専版 Can-Do List（資料2）における海外組、国内組の2群の Listening, Speaking, Interactive Skills, Reading, Writing の各カテゴリーの各15問の加算値を対応のないt検定を用いて比較したところ、どの分類においても5%水準で有意差が見られたカテゴリーはなかった。また、個別に各分類の項目について2群を対応のないt検定を用いて比較した場合においては、Listening の Q12「趣味・興味・週末の予定などについて、ゆっくり話されると、理解することができる」のみが5%水準で有意であった ($p = 0.05$)。

これらの結果から、海外組と国内組のインターンシップ参加以前の状況として、英語運用能力試験と英語運用能力自己評価に関しては、2群の間に統計的な有意差はほとんどなく、英語を使用することに関して、海外組の方がより大きな不安を抱えていたということがわかった。

3.2 海外組に関するインターンシップ参加前後の比較

3.2.1 インターンシップ参加前と参加直後の英語学習・使用の態度とモチベーション

まず、海外組の英語学習・使用の態度とモチベーションについて、インターンシップ参加前と参加後の状況を比較するために、参加前の高専版 Attitude / Motivation Test Battery での各カテゴリーの加算値と参加直後の各カテゴリーの加算値を対応のあるt検

定を用いて比較した。その結果、いずれのカテゴリにおいても、5%水準での有意差は見られなかった。

次に、海外組の参加前、参加直後の値を各質問別に対応のある t 検定を用いて比較したところ、5%水準で有意差が見られたのは、「外国語への興味」のカテゴリに属する Q3「私は多くの外国語を習得したいととても思う」($p=0.02$)と「英語使用への不安」に属する Q32「電話で英語を話さなければならないとしたら、私は嫌だと思う」($p=0.05$)であった。

Q3の参加前と参加直後の平均値を比較すると(表7参照)、外国語習得への興味が薄れていることがわかる。これは、2011年に筆者がパイロットスタディとして行った、2011年度に東京高専専攻科1年生で国内または海外インターンシップに参加した31人を対象とした調査(櫻村, 2012)の結果とは異なっている。パイロットスタディにおいては、Gardnerの Attitude / Motivation Test Battery をもとに作成した質問紙を用いなかったが、「英語もしくはインターンシップの派遣先の国の公用語をもっと勉強したいと思うようになった」という質問に対する2011年度海外インターンシップに参加した10名の学生の回答(4件法リッカート形式)の平均値は、3.3(標準偏差 = .82)であった。パイロットスタディにおいては、4件法のリッカート形式を用いたが、平均値が3.3であったということは、多くの学生が「とてもそう思う」または「そう思う」と回答していたと言える。質問もリッカート形式の件数も違うので、簡単に比較することはできないが、今回の調査では、海外インターンシップ参加者の外国語への興味は海外インターンシップ参加直後に薄れてしまったと言える。

その他に5%水準で有意差のあった Q32の参加前と参加直後の平均値を比べてみると、英語での電話応対に対する不安は参加前よりも低くなっていることが言える。高専版 Attitude / Motivation Test Battery のカテゴリ「英語使用への不安」に関しては、上述のとおり、参加前と参加直後で有意差は

なかったものの、平均値は低下傾向にあり、不安は減少してきていることが読み取れる。

英語を使用することへの不安の減少は、課題として課した英語学習・使用ログからも推測することが可能である。ここで、学生の実際の記述から例を挙げる。学生 A (マレーシアにある会社への派遣、電気電子工学専攻)は、実習初日にインド系の社員から学生 A が実習内で開発するアプリケーションがどのような場面で用いられる予定なのかについての説明を英語で受けたときの感想として、以下のことを書いている。

初めのうちは何回か聞き返して確認するなどしないと、内容が聞き取れない場面が多く見られた。自分がしゃべるとなると、すぐには文法どおりに話すことはできず、ただ、単語を並べるだけになってしまったことも多々あった。後になってゆっくり考えてみると簡単に文が作れる内容でも、とっさにしゃべることはできなかった。緊張してしまったことと、自信がなかったことが大きな原因であると思った。(下線筆者強調)

しかし、実習3日目には、初日の反省をもとに以下のように英語使用への態度の変化が見られるようになる(この日英語を使用した状況としては、従業員が使用するデータ管理ソフトのアップデートに関する要望を募るという作業および、休憩時間において、自分自身のことや日本のことに関して会話をしたと記述あり)。

1日目の反省を生かし、積極的に話しかけてみた。後から考えれば、文法などは全くと言っていいほど正しくはなかったが、意外と通じた。このことからどのぐらい文法を壊しても通じるのかというラインがだんだんわかってきた。

(下線筆者強調)

■表7：高専版 Attitude / Motivation Test Battery において、海外組でインターンシップ参加前と参加直後で5%水準で有意差が出た質問の記述統計データ

質問番号と時期		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
Q3	参加前	3.75	8	1.16	.41
	参加直後	2.13	8	1.55	.54
Q32	参加前	4.75	8	.46	.16
	参加直後	4.00	8	.92	.32

■表 8：高専版 Attitude / Motivation Test Battery におけるインターンシップ参加前と参加直後の各カテゴリーの記述統計データ

カテゴリーと時期		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
外国語への興味	参加前	19.88	8	4.42	1.56
	参加終了直後	16.88	8	4.94	1.74
モチベーションの強さ	参加前	12.88	8	3.72	1.31
	参加終了直後	14.13	8	5.08	1.79
英語の授業への不安	参加前	13.50	8	5.73	2.02
	参加終了直後	15.00	8	5.52	1.95
英語を学習することへの態度	参加前	13.25	8	4.46	1.57
	参加終了直後	15.75	8	4.06	1.43
統合的志向性	参加前	15.75	8	3.45	1.22
	参加終了直後	16.13	8	3.39	1.20
英語学習への意欲	参加前	14.75	8	3.73	1.31
	参加終了直後	16.50	8	4.24	1.50
英語使用への不安	参加前	22.25	8	2.49	.88
	参加終了直後	20.25	8	3.37	1.19
道具的志向性	参加前	13.38	8	4.53	1.60
	参加終了直後	14.50	8	2.56	.90

実習7日目に従業員に開発途中のアプリケーションのプロトタイプについて英語で説明し、テストしてもらった際の感想としては、以下のようなことを書いている。

9/3 [原文どおり] に説明した際に意味が伝わりやすかった単語を選んで使用した。また、会話をすること自体に緊張することがなくなり、少し余裕が出てきたので、助動詞や関係代名詞などを使用して少し複雑な言い回しにもチャレンジしてみた。やはり、最初はうまくいかなかったが、最初は、より単純な言い方でもしどろもどろだったことと比較すると、だんだんしゃべれるようになっていくことは実感できた。このように言語能力というのは上達していくのかと、勉強になっていることを確信できた。

(下線筆者強調)

上記引用から、学生Aは、実習最初の1週間で英語を使用して行う仕事やコミュニケーションを図ることについての自信を獲得しつつあること、自分の英語能力(ここではスピーキング能力と思われる)の上達について、確信していることがうかがえる。

次に学生B(ベトナムにある会社への派遣、物質

工学専攻)の場合をしてみる。学生Bは、インターンシップ参加のために、香港の空港経由でベトナムへ向かった際に従業員に搭乗口や飛行機乗り換えなどについて英語で質問したときの感想として、「日本語が全く通じない、という環境がほぼ初めてであったため、乗り換えがうまくいか大変不安であった」と、実習が始まる前から英語を使うことへの不安を強く感じているようであった。しかしながら、ベトナム人との意思疎通は英語で行われた実習の中で、実習初日に、「多少文法が間違っているも単語を拾っていけばお互いなんとなく意味がわかる」ということを指摘し、実習2日目の滞在先ホテルの従業員との英語での会話の感想として、以下のように少しずつ英語によるコミュニケーションのコツを見つけ出し、英語使用への自信もつけ始めていることがわかる。

自分の英語では通じるか心配であったが、とにかく話してみることが重要であると感じた。単語さえ間違っていなければ、意思の疎通は意外にうまくいく。

また、彼は実習最終日に、4週間のインターンシップを振り返っての以下のことばを総括として書いている。

お互いに英語が自由自在、というわけではないので、逆に失敗を恐れずに積極的に英語を使えたと思う。テストのように点数をつけるわけではなく、単にコミュニケーションのツールとして使用するのであれば、中学校レベルの英語でも十分であるということを実感し、国際交流に対する自分のハードルが下がったような気がする。その国の言葉がほとんどわからずとも英語が理解できるか否かでコミュニケーションの幅は大きく広がることを実感し、世界の公用語である英語の重要性を改めて認識することができた。(下線筆者強調)

上記の学生 B の総括から、インターンシップ参加前の不安を脱し、インターンシップの最後には、身構えることなく英語でのコミュニケーションが行えるようになったことが表現されている。また、彼のこの総括の後半は、まさに、英語を外国語として英語を使用する expanding circle に属するベトナム人と日本人の英語による交流から事前研修で指導を行った world Englishes の概念が実体験を伴った形で理解できたことの現れと言えよう。

この項目の最後として、海外組のインターンシップ参加終了直後と参加終了から約4か月たった後の英語学習・英語使用の態度およびモチベーションの状況を比較する(表9)。参加直後の高専版 Attitude /

Motivation Test Battery での各カテゴリーの加算値と参加終了から約4か月たったときの各カテゴリーの加算値を対応のある t 検定を用いて比較した。その結果、いずれのカテゴリーにおいても、5%水準での有意差は見られなかった。

次に、海外組の参加終了直後、参加終了から約4か月後の値を各質問別に対応のある t 検定を用いて比較したところ、5%水準で有意差が見られたのは、「外国語への興味」のカテゴリーに属する Q3「私は多くの外国語を習得したいととても思う」($p = 0.02$)と「英語使用への不安」に属する Q31「どこで英語を話す場合であったとしても、私は不安になってしまう」($p = 0.02$)であった。

Q3の平均値は、既に述べた参加前と参加終了直後の比較では、低下が見られた。参加終了直後と参加終了から4か月後の比較では上昇を示し、多くの外国語を学習することへの興味を取り戻していると言える。参加前と参加終了直後の比較では、英語による電話応対に関する質問の値が5%水準で有意かつ低下が見られたが、参加終了直後と参加終了から約4か月後の比較においては、Q31の平均値は低下していることから、電話応対といった限られた英語使用場面ではなく、英語を使用するあらゆる場面を想定しての不安が減少したと言える。

■ 表 9：高専版 Attitude / Motivation Test Battery において、参加終了直後、参加終了から約4か月後の各カテゴリー別の記述統計データ

カテゴリーと時期		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
外国語への興味	参加直後	16.88	8	4.941	1.74
	参加終了4か月後	19.00	8	4.472	1.58
モチベーションの強さ	参加直後	14.13	8	5.083	1.79
	参加終了4か月後	15.13	8	4.518	1.59
英語の授業への不安	参加直後	15.00	8	5.529	1.95
	参加終了4か月後	15.25	8	5.339	1.88
英語を学習することへの態度	参加直後	15.75	8	4.062	1.43
	参加終了4か月後	17.13	8	4.016	1.42
統一的志向性	参加直後	16.13	8	3.399	1.20
	参加終了4か月後	16.50	8	2.507	.88
英語学習への意欲	参加直後	16.50	8	4.243	1.50
	参加終了4か月後	16.88	8	4.454	1.57
英語使用への不安	参加直後	20.25	8	3.370	1.19
	参加終了4か月後	18.75	8	1.982	.70
道具的志向性	参加直後	14.50	8	2.563	.90
	参加終了4か月後	13.63	8	2.200	.77

■表10：高専版 Attitude / Motivation Test Battery において、参加終了直後、参加終了から約4か月後の各質問別に対応ある t 検定をした際に5%水準で有意差が出た質問の記述統計データ

質問番号と実施時期		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
Q3	参加終了直後	2.13	8	1.55	.54
	参加終了4か月後	2.88	8	1.55	.54
Q31	参加終了直後	4.13	8	.64	.22
	参加終了4か月後	3.38	8	.51	.18

3.2.2 海外組のインターンシップ参加前と参加後の英語運用能力試験の正答数および英語運用能力自己評価の比較

海外組のインターンシップ参加前と参加後の英語運用能力試験の正答数の平均は、表6に示したように、参加前の82.00から参加後は97.75に上昇した。海外組の参加前と参加後の正答数を対応のある t 検定を用いて比較したところ、5%水準で有意差が見られた ($p = .03$)。一方、国内組の平均正答数は、参加前74.25から参加後75.67と若干の上昇はしたが、国内組の参加前と参加後の正答数を対応ある t 検定を用いて比較しても、有意差は見られなかった。このことから、海外インターンシップは、英語運用能力試験の正答数向上に何らかの良い影響を与えたと言えるであろう。

表11は、海外組の高専版 Can-Do List においてインターンシップ参加前と参加後の各カテゴリー Listening, Speaking, Interactive Skills, Reading, Writing の加算値平均を表した記述統計のデータである。参加前後を比較すると、いずれのカテゴリーの平均も上昇している。また、インターンシップ参加前と参加後の各カテゴリーの各15問の加算値を対応のある t 検定を用いて比較した。その結果、

Writing を除く Listening ($p = .04$), Speaking ($p = .02$), Interactive Skills ($p = .03$), Reading ($p = .05$) において、5%水準で有意差が見られた。これらの結果から、英語運用能力を自分で評価する場合であっても、インターンシップ参加前と参加後では、参加後の方ができるようになった項目が増えた、または以前より容易にできるようになった項目が増えた海外組の学生が多いと考えられる。

3.3 海外組、国内組の事前学習、事後学習への反応

今回、インターンシップ事前学習と事後学習を筆者が担当する「英語演習Ⅰ」の授業内で行ったこともあり、海外インターンシップ参加者だけでなく、国内インターンシップ参加者にも有益となる内容を提供する必要があった。高専の場合、就職後に海外の工場での勤務を命じられ、赴任する学生も少ないことから、世界における国際語としての英語の役割や world Englishes の概念は今後技術者として海外で活躍する未来を持つ可能性のあるどの学生たちにも知ってもらいたいという筆者の希望から取り入れた。また、カルチャーショックや異文化許容の過程に関しても、カルチャーショックは、日本国外

■表11：高専版 Can-Do List における各カテゴリーおよび実施時期別の記述統計データ

カテゴリーと時期		平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差
Listening	参加前	43.00	8	15.69	5.54
	参加後	46.88	8	13.88	4.90
Speaking	参加前	30.63	8	10.37	3.66
	参加後	34.50	8	9.69	3.42
Interactive Skills	参加前	27.63	8	10.15	3.59
	参加後	31.88	8	9.84	3.48
Reading	参加前	39.75	8	13.49	4.77
	参加後	46.25	8	11.47	4.05
Writing	参加前	36.13	8	17.13	6.05
	参加後	41.63	8	13.95	4.93

の人々や文化との接触で起こるだけでなく、国内においても学校における学生という立場から会社など組織への就職や自分が生まれ育った地域から他地域で生活をするによっても起こる可能性がある。と筆者が以前から考えていたため、「特別実習」において国内インターンシップを選んだとしても、自分の身に近い将来起こる可能性があることとして学習してほしいという筆者の意見を、事前学習と事後学習のポスタープレゼンテーションの総括となるディスカッションの前に伝えておいた。

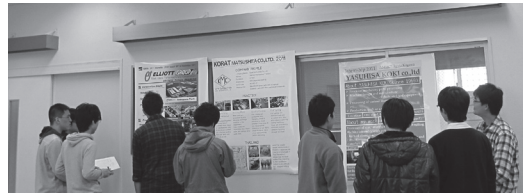
事後学習としては、表12にあるように、インターンシップに関するポスタープレゼンテーション、異文化体験、カルチャーショックに関するグループ活動とディスカッション（1グループ4、5名）、そしてグループディスカッションをもとにしたクラス全体討論を行った。グループ活動とディスカッションに関しては、ワークシートを各学生に配布し、個人作業で埋めてもらった後、グループ内でクラス全体討論に出したいテーマとそれに関する具体例をまとめてもらった。グループ活動におけるグループ分けにも配慮し、海外インターンシップと国内インターンシップ参加者がうまく混ざるようにした。

事後学習に関するアンケート調査の記述統計データを表12にまとめた。いずれの項目においても、海外組の平均値の方が高いことがわかる。各事後学習に関する国内組と海外組の回答を対応のない t 検定で比較したところ、5%水準で有意差があった項目はなかった。

事前学習を終えた直後かつインターンシップ派遣前に行ったアンケート調査（資料4）の記述統計データは表13である。いずれの質問に対する回答の平均値も、海外組の値の方が国内組の値よりも高かった。

各質問の海外組と国内組の回答を対応のない t 検

■ 写真 1, 2：事後学習として自分のインターンシップについてポスタープレゼンテーションを行う学生たちの様子



定で比較したところ、5%水準で有意差があったのは、質問1の「英語を使用する人々、world Englishes の概念に関する講義と活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う」であった。これは、国内組の場合、身近に迫ったインターンシップにおいて、英語を使用するという状況が想定されていない派遣先が圧倒的に多かったためであると推測できる。

インターンシップ参加前、参加終了直後および事後学習終了後の海外組（表14）、国内組（表15）の各質問への回答の記述統計データを見ると、参加終了直後および事後学習終了後のいずれの調査においても、どの項目も参加前の調査同様、海外組の方が高いことがわかる。また、海外組の平均値は、質問

■ 表12：事後学習に関する2群の反応

質問番号		群	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
1	発話練習としてのポスタープレゼンテーション	国内	12	3.25	1.35	.39
		海外	8	3.63	.91	.32
2	英語学習としてのポスタープレゼンテーション	国内	12	2.92	1.31	.37
		海外	8	3.25	.88	.31
3	グループ活動・ディスカッション	国内	12	2.25	1.13	.32
		海外	8	3.00	1.06	.37
4	クラス全体討論	国内	12	2.25	1.13	.32
		海外	8	2.88	1.12	.39

■ 表 13：事前学習を終えた直後の2群のアンケート調査記述統計データ

質問番号	カテゴリー	群	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
1	国際語としての英語	国内組	12	2.25	.75	.21
		海外組	8	3.63	.51	.18
2	文化の構成要素	国内組	12	2.08	1.16	.33
		海外組	8	2.75	1.16	.41
3	文化の衝突に関する活動	国内組	12	1.92	1.08	.31
		海外組	8	2.75	1.16	.41
4	カルチャーショックと異文化許容の過程	国内組	12	2.33	1.23	.35
		海外組	8	3.00	1.30	.46

■ 表 14：海外組の事前学習，参加終了直後，事後学習に関するアンケート調査記述統計データ

質問番号	カテゴリーと時期	平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差	
1	国際語としての英語	参加前	3.63	8	.518	.183
		参加終了直後	3.75	8	.463	.164
		事後学習後	3.88	8	.835	.295
2	文化の構成要素	参加前	2.75	8	1.165	.412
		参加終了直後	3.13	8	1.553	.549
		事後学習後	3.50	8	1.195	.423
3	文化の衝突に関する活動	参加前	2.75	8	1.165	.412
		参加終了直後	3.25	8	1.669	.590
		事後学習後	3.63	8	.916	.324
4	カルチャーショックと異文化許容の過程	参加前	3.00	8	1.309	.463
		参加終了直後	3.50	8	1.414	.500
		事後学習後	3.38	8	1.302	.460

■ 表 15：国内組の事前学習，参加終了直後，事後学習に関するアンケート調査記述統計データ

質問番号	質問のカテゴリーと実施時期	平均値	N	標準偏差	平均値の標準誤差	
1	国際語としての英語	参加前	2.25	12	.754	.218
		参加終了直後	2.25	12	.754	.218
		事後学習後	2.17	12	.718	.207
2	文化の構成要素	参加前	2.08	12	1.165	.336
		参加終了直後	2.08	12	.996	.288
		事後学習後	2.00	12	1.044	.302
3	文化の衝突に関する活動	参加前	1.92	12	1.084	.313
		参加終了直後	2.25	12	1.288	.372
		事後学習後	2.00	12	1.044	.302
4	カルチャーショックと異文化許容の過程	参加前	2.33	12	1.231	.355
		参加終了直後	1.92	12	.900	.260
		事後学習後	2.00	12	1.044	.302

4 「カルチャーショックの段階とカルチャーショックへの対処法を学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う」を除いては、回を追うごとに平均値が上昇していることがわかる。

各質問に対する海外組のインターンシップ参加前、参加終了直後、事後学習後の回答を対応のある t 検定で比較したところ、インターンシップ参加前と事後学習終了後の質問3「異文化の人と文化の違いから起こる衝突が起こった際にとるべき行動について学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う」への回答が、5%水準で有意差があった ($p = .04$)。このことから、海外組にとっては、事後学習として、自分が海外で体験したカルチャーショックの経験を他の学生たちとグループワークやクラス全体でのディスカッションを通じて分かち合う活動を通じて、過去に学習した内容の意義を再評価できた証拠と言えよう。

4 まとめ

調査参加者総数は少なく、単年調査ではあったが、前項3において、分析・考察してきたように、海外インターンシップは、以下のような教育的効果を持つ可能性が指摘できる。第1に、英語学習・使用への態度およびモチベーションに関しては、海外インターンシップ中の英語によるコミュニケーションを通じて、英語使用の不安を減少する可能性がある。次に、英語運用能力に関しては、国内インターンシップ参加者との比較では、海外インターンシップ参加者の方が、参加前よりも正答数が向上する傾向があり、学生自身による自己評価においても、Writingを除く Listening, Speaking, Interactive Skills, Reading の4分野において改善が望める可能性がある。

今後、同テーマでの研究調査と東京高専での教育を続けていくにあたって、以下のことを課題として考えている。まず、今回の調査で用いた Gardner の Attitude / Motivation Test Battery の見直しである。Gardner の Attitude / Motivation Test Battery では、

英語を母語とする人々、英語母語話者の文化や行動様式などへの興味関心および英語母語話者とその文化への集団と一体化を測る「統合的指向性」についての質問項目があった。しかしながら、東京高専から海外インターンシップに行く学生は、現在のところ、英語が母語とされる国や地域ではなく、英語を第2言語または外国語として使う人たちの暮らす国である。そして、彼らの就労環境下では、英語はリンガ・フランカとして用いられているのである。このことを考慮すると、Gardner の「統合的指向性」に関しての項目は、本調査においては、限界があったと感じている。Gardner の「統合的指向性」の代わりに、内的動機づけ (intrinsic motivation) を測る質問紙を Gardner の Attitude / Motivation Test Battery にうまく組み合わせ、さらなる精緻化を図ることができたらよいのではないかと考えている。

東京高専において学生の教育を続けていくにあたっては、海外インターンシップに参加した学生たちの英語学習・使用ログで書いていた英語のコミュニケーションの場においてのつまづきをもとに、今後の学生への指導に生かしていきたいと思う。また、国内インターンシップに参加する学生にも将来やって来るかもしれない海外赴任、海外留学の準備として、海外インターンシップ参加者の体験をうまく引き出し、学生間で分かち合い、異文化許容と異文化理解についての知識を深めていってもらえる活動を提案、そして実践できたらと考える。

謝辞

本研究を行う機会を与えてくださいました公益財団法人日本英語検定協会の皆様と選考委員の先生方、特に助言者となってくださった小池生夫先生に深くお礼申し上げます。また、独立行政法人大学入試センターの荘島宏二郎先生には、研究の過程で統計学的なデータ処理に関して貴重な助言をいただきました。本当にありがとうございました。そして、研究調査に参加してくれた東京高専の専攻科1年生、彼らの国内外でのインターンシップという学習経験を支えてくださっている企業・研究機関の方々、東京高専の教職員の方々に心から感謝いたします。

注

- (1) 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」文部省（現 文部科学省）、通商産業省、労働省共同発表（1997年 9 月 18 日発表）
http://www.jil.go.jp/jil/kisya/syokuan/970918_01_sy/970918_01_sy_kihon.html
- (2) 「大学等における平成 19 年度インターンシップ実施状況調査について」概要
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2010/04/16/1259257_1_1.pdf
平成 20 年度（2008 年度）以降の大学などにおけるインターンシップ実施状況調査は、引き続き文部科学省において行われているようであるが、19 年度以降の調査結果の公表はされていない。
- (3) 亀野淳（2004）は、「インターンシップにおける教育的意義」において、日本における高等教育機関のインターンシップ制度の実施について、工学部でのインターンシップは「ずいぶん昔から「工場実習」として存在していたことを指摘している。
- (4) 2011 年 8 月に行われた高専機構留學生交流促進センター主催留學生・国際交流担当者研究会（2011 年 8 月）における、竹田恒美（東京高専一般教育科教授）による「海外インターンシップ立ち上げについて 東京高専の事例紹介」発表資料より。中国の江蘇富士通信技術有限公司は東京高専前校長の教

- え子による紹介、深圳テクノセンターは東京高専地域連携コーディネーターからの紹介、タイのコラート松下およびマレーシアの森発條は東京高専卒業生が起業した会社である。フィンランドのヘルシンキ応用科学大学は、本校が提携留学プログラムを持ち、相互に学生を送り合っている。また、電子工学科の研究室では現地の研究室との研究に基づく交流が行われている。
- (5) <http://publish.uwo.ca/~gardner/docs/englishamtb.pdf>
- (6) Gardner の Battery のカテゴリー <http://publish.uwo.ca/~gardner/docs/QuestionnaireKeys.pdf>
- (7) 「統合的志向性」(integrative orientation) と「道具的志向性」(instrumental orientation) とは、Gardner and Lambert (1972) において分類された第 2 言語・外国語習得の動機づけの分類である。「統合的志向性」は、「英語という言葉、英語を母語とする人々、英語母語話者の文化や行動様式などに興味や関心があり、積極的に受け入れ、その集団と一体化したいと思う心理的欲求のこと」。「道具的志向性」は、「英語を学習することによって、功利的目的（例：社会的成功・大学入試での合格）を達成したいと思う心理的欲求のことである」。白幡知彦他.『改訂版 英語教育用語辞典』（大修館書店, 2009）p.198 より定義を一部引用。

参考文献（*は引用文献）

- * 千葉隆一.(2010).「文系大学での海外インターンシップの意義・効果についての考察 文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学の事例」.『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』, 10. pp. 207-224.
- * 独立行政法人国立高等専門学校機構.「国立高等専門学校の学校制度上の特色」. Retrieved from <http://www.kosen-k.go.jp/hj/1-12tokushoku.html>
- * Educational Testing Service. (2000). TOEIC Can-do Statements, “TOEIC Can-Do Guide — Linking TOEIC Scores to Activities Performed Using English.” http://www.ets.org/Media/Research/pdf/TOEIC_CAN_DO.pdf
- * Gardner, R.C. (2004). Attitude / Motivation Test Battery. Retrieved April 2, 2012, from <http://publish.uwo.ca/~gardner/docs/englishamtb.pdf>.
- * Gardner, R.C., & Lambert, W.E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA.: Newbury House.
- * 株式会社リント.(2012).『TOEIC Test プラスマガジン』. 2012年 3 月号.
- * 株式会社リント.(2012).『TOEIC Test プラスマガジン』. 2012年 11 月号.
- * 亀野淳.(2004).「インターンシップにおける教育的意義」.『工学教育』, 52(4). pp.25-29.
- * 櫻村真由.(2012).「海外インターンシップが英語学習・使用のモチベーションに与える影響について」.『平

- 成 24 年度高専教育フォーラム 教育研究活動発表概要集」. <http://www.kosenforum.kosen-k.go.jp/2012/wp-content/uploads/gaiyo-final.pdf>
- * 小山由紀江.(2007).『Can-Do Statements のパイロット調査と分析』.『名古屋工業大学共通教育 New Directions』, 25. pp.89-103. Retrieved August 27, 2013, from <http://presentation.web.nitech.ac.jp/publication/24.pdf>.
- * 文部科学省.(2008).「大学等における平成 19 年度インターンシップ実施状況調査について」概要. Retrieved January 10, 2013, from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afiedfile/2010/04/16/1259257_1_1.pdf.
- * 文部省（現 文部科学省）、通商産業省、労働省.(1997).「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」. Retrieved from http://www.jil.go.jp/jil/kisya/syokuan/970918_01_sy/970918_01_sy_kihon.html
- 野口徹・吉川孝三・中村雅人.(2008).「工学系大学院における海外インターンシップ 教育とその効果の評価」.『工学教育』, 56(3), pp.80-84.
- * 白幡知彦他.(2009).『改訂版 英語教育用語辞典』. 東京：大修館書店.
- 竹田恒美.(2011).「海外インターンシップ立ち上げについて 東京高専の事例紹介」. 独立行政法人国立高等専門学校機構留學生交流促進センター主催留學生・国際交流担当者研究会資料.

吉川友子・森和憲・奥山慶洋・市坪誠.(2011).「コミュニケーション能力および問題解決能力の育成にお

ける海外インターンシップ事前研修の役割」.『高専教育』. 34. 8950-900.

資料

資料 1 : 高専版 Attitude / Motivation Test Battery

言語学習・使用に関する態度とモチベーションに関するアンケート

みなさんの英語や言語を習得する気持ちについて、今後、東京高専からインターンシップへ行く後輩たちへより良い事前準備・事後学習を英語教員として提供するために調べています。授業内でお話ししたように、みなさんのご回答は、榎村真由の研究調査のデータとして使用させていただくことがあります。みなさんから集められたデータは、榎村真由の研究調査のためだけに使用され、この調査へご協力いただくみなさんに不利益を与えるものではありません。このアンケートへの回答と榎村への返却で、今回の調査への協力で同意していただいたと考えさせていただきます。ご協力ありがとうございます ☺

専攻 () 番号 () 名前 ()

インターンシップ行先 (国名・都市) : _____

インターンシップ受け入れ会社・機関 : _____

1. 以下の各文を読み、全くそう思わない場合には 1、そう思わない場合には 2、どちらとも言えない場合には 3、そう思う場合には 4、とてもそう思う場合には 5 を選び、各文の横の欄に○を付けてください。

	質問	回答
1	多くの外国語を完璧に話せたらよいのと思う。	1 2 3 4 5
2	多くの外国語で新聞や雑誌が読めたらよいのと思う。	1 2 3 4 5
3	私は多くの外国語を習得したいととても思う。	1 2 3 4 5
4	私はもし他の国に滞在するとしたら、その国の言葉を学ぶだろう。	1 2 3 4 5
5	外国語を話す人々と会うのは楽しい。	1 2 3 4 5
6	私は自分が見聞きする英語をすべて理解しようと努める。	1 2 3 4 5
7	私は毎日英語を学習したり、使ったりすることによって新しい英語の知識を得ている。	1 2 3 4 5
8	私は英語の授業で何かわからないことがあったら、いつでも先生に手助けを求める。	1 2 3 4 5
9	私は一生懸命英語を学習している。	1 2 3 4 5
10	私は英語を学習しているとき、自分の気をそらすものを無視し、自分がやるべき課題に注意を払う。	1 2 3 4 5
11	私は英語の授業で発言しているとき、自分の発言が正しいと確信を持ったことがない。	1 2 3 4 5
12	英語の授業で自ら進んで設問の答えを言うことは恥ずかしい。	1 2 3 4 5
13	自分のクラスの他の学生が自分より上手に英語を話しているように見えるのは気が気でない。	1 2 3 4 5
14	私は英語の授業で発言しているとき緊張する。	1 2 3 4 5
15	私が英語を話すときクラスの他の学生が自分を笑うのではないかと時々不安になる。	1 2 3 4 5
16	英語を学習／習得することはとてもすばらしい。	1 2 3 4 5
17	私は英語を学習／習得することを本当に楽しんでいる。	1 2 3 4 5
18	英語は自分の学校のカリキュラムの中でとても重要な部分を占めている。	1 2 3 4 5
19	私は可能な限り英語をたくさん学ぼうと思う。	1 2 3 4 5
20	私は英語を学習／習得することが大好きだ。	1 2 3 4 5
21	英語を学ぶことは英語を話す人々とリラックスして付き合うことを可能にしてくれるので重要だ。	1 2 3 4 5
22	英語を学習することは、もっと多くのそしてもっと多様な人たちと出会い、話すことができるようになるので重要だ。	1 2 3 4 5

23	英語を学習することは、英語圏の生活様式をもっと理解し、より価値を認めて評価できるようにするのが重要だ。	1	2	3	4	5
24	英語を学習することは、英語を話す人々ともっと簡単に交流できるようになるので重要だ。	1	2	3	4	5
25	私は英語のあらゆる側面を知りたいという強い願望がある。	1	2	3	4	5
26	もしすべてが自分に任されているのならば、私は自分の時間のすべてを英語の学習に充てたい。	1	2	3	4	5
27	英語が自分にとって自然になるように、私は英語をよく学びたい。	1	2	3	4	5
28	私はできるだけたくさん量の英語を学びたいと思っている。	1	2	3	4	5
29	英語が流暢に使えたらよいのと思う。	1	2	3	4	5
30	旅行者に英語で話さなければならぬとしたら、私は緊張するだろう。	1	2	3	4	5
31	どこで英語を話す場合であったとしても、私は不安になってしまう。	1	2	3	4	5
32	電話で英語を話さなければならぬとしたら、私は嫌だと思う。	1	2	3	4	5
33	授業以外のどんな場所においても英語を話すのは落ち着かないだろう。	1	2	3	4	5
34	誰かが英語で何かを尋ねてきたら、私は不安だ。	1	2	3	4	5
35	英語を学習することは、自分のキャリアのために必要なので重要だ。	1	2	3	4	5
36	英語を学習することは、もっと教養をつけるために重要だ。	1	2	3	4	5
37	英語を学習することは、良い仕事を得るのに有益なので重要だ。	1	2	3	4	5
38	英語を学習することは、もし私が英語を知っていれば他の人がもっと自分を尊敬してくれるので重要だ。	1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました！

資料 2：高専版 TOEIC Can-Do List

英語で、～ができますか？ Can-Do List アンケート

このアンケートは、「自分は英語で何ができるか」というあなた方の自己評価に基づいて、この1年でのご自身の英語の力の伸び具合について振り返ってみるものです。4月当初に自分の英語の状況を入れてもらい、年度が終わる頃に再度、その時の自分の状況を入れてもらい、ご自身の伸びを比較するものです。

アンケートの内容は日常生活でよく起こることがあります。これまでの自分の人生の中でこのような経験がなかったとしても、真剣に、想像力を使って考え、質問されたことができるかできないか回答してください。ご協力をお願いします。

各質問に5段階で答えてください。

全くできない	ほとんどできない	何とかできる	だいたいできる	簡単にできる
1	2	3	4	5

左側の回答欄には4月時点でのあなたの状況、右側の解答欄には、年度末のあなたの状況を書いてもらいます。

Listening (各文、英語でできるかを聞いています。)

No.		4月	13年 2月
1	“How are you?” “Where do you live?” “How do you feel?” “What do you do?” などの簡単な質問を聴いて理解することができる。		
2	売り場の人がいっような物の値段を言うのを聴いて理解することができる。		
3	どこにレポートを提出するのか、ゆっくり説明されると、理解することができる。		
4	クラスでの課題のやり方を聴いて理解することができる。		
5	日常生活で生じた簡単な問題に関する説明を聴いて理解することができる。		
6	時間・数・場所などの具体的な情報のアナウンスを聴いて理解することができる。		
7	ラジオ放送の「今日のニュース項目」を聴いて、理解することができる。		
8	電話で、先生が宿題について出した指示を聴いて理解することができる。		

9	電話で、友人と会う約束をするとき、それを聴いて理解することができる。		
10	ラジオで、サッカーや野球など、自分の好きなスポーツのアナウンスを聴いて、理解することができる。		
11	ある道路が、一時的に閉鎖されている理由を、ラジオで聴いて、理解することができる。		
12	趣味・興味・週末の予定などについて、ゆっくり話されると、理解することができる。		
13	会議が、何時に、どこの部屋で開かれるのかという説明を聴いて、理解することができる。		
14	なぜ、このレストランがもう1つのより良いのか、聴いて理解することができる。		
15	ネイティブの人たちが時事問題について議論しているのを聴いて、理解することができる。		

Speaking (各文、英語でできるかを聞いています。)

1	きちんとした挨拶ができる。		
2	きちんとした自己紹介(出身地や家族構成なども含む)ができる。		
3	最近見た映画・テレビ番組のあらすじを、伝えることができる。		
4	友達について、外見的特徴・性格的特徴を、言い表すことができる。		
5	大学の勉強について、詳しく話すことができる。		
6	レストランで、食べ物注文することができる。		
7	時事問題や天気など、広く社会的な事柄について話すことができる。		
8	何時に起きて、何時にお昼を食べるかなど、自分の日常生活を話すことができる。		
9	来年の予定など、学生生活の目標・予定について、話すことができる。		
10	友達に、宿題のやり方やレポートの書き方などを伝えることができる。		
11	航空券の予約について、出発日時や行き先の変更を、電話で行うことができる。		
12	最近経験した面白い出来事を、友人に、話すことができる。		
13	準備をすれば、自分の専門分野について、30分間のプレゼンテーションをきちんとできる。		
14	先生・友達・子供など、話す相手によって、適切な話し方ができる。		
15	自分の家までの道を、人に伝えることができる。		

Interactive Skills (各文、英語でできるかを聞いています。)

1	郵便局・銀行・薬局などの場所で、簡単なやり取りをすることができる。		
2	3人グループの夕食の予約を、電話で行うことができる。		
3	電話で、伝言を受けたり、残したりすることができる。		
4	留学生や訪問者に対して、大学の特徴を説明することができる。		
5	レポートの書き方について、最善の方法を友達と話し合うことができる。		
6	パソコンに欲しい機能について、店の人と話し合うことができる。		
7	自分の病気の症状について、医者説明することができる。		
8	修理してほしい家電について、どこが悪い説明することができる。		
9	旅行会社に飛行機のスケジュールを確認するなど、電話で、情報を得ることができる。		
10	自分の借りたいアパートのタイプについて、不動産屋と話し合うことができる。		
11	自分の研究・勉強していることについて、小学校のクラスで話をするすることができる。		
12	英語母語話者のゲストと、世界の出来事について話し合うことができる。		
13	研究室の研究改革の方法について、先生と話し合うことができる。		
14	デパートに電話して、ある商品の在庫を確認することができる。		
15	研究室に所属希望の後輩学生や留学生に対して、面接を行うことができる。		

Reading (各文, 英語でできるかを聞いています。)

		4月	現在
1	店頭の看板を見て、「本屋」「クリーニング屋」など、何の店であるかを理解できる。		
2	電車やバスの時刻表を読み、理解することができる。		
3	レストランのメニューを読み、理解することができる。		
4	電話帳を見て、必要な情報を見つけることができる。		
5	レポートなどに先生が書いた、手書きのメモを理解できる。		
6	交通標識を読み、理解することができる。		
7	簡単な説明書など、順々に記された指示文を理解できる。		
8	シラバスを読み、理解することができる。		
9	旅行パンフレットを読み、理解することができる。		
10	Time や Newsweek などの雑誌記事や新聞記事を、辞書を使わずに、理解できる。		
11	初心者向けに書かれたコンピュータのマニュアルを、辞書を使わず、理解できる。		
12	意見・姿勢の異なる2人の政治家についての新聞記事を、辞書を使わずに読んで、その違いを理解することができる。		
13	辞書を少し使えば、専門書を読んで、理解できる。		
14	一般的な小説を、辞書を使わずに読んで、理解できる。		
15	御礼の手紙を読んで、理解できる。		

Writing (各文, 英語でできるかを聞いています。)

1	週末旅行に必要な物のリストを書くことができる。		
2	友人が送ってくれたプレゼントに対する、2～3文のお礼を書くことができる。		
3	予定の授業に出られない理由を説明した簡単なメモを、友達に書くことができる。		
4	休暇中に何をしているかについて述べたはがきを、友人に書くことができる。		
5	学校の講座の申込書を記入することができる。		
6	自分の家までの行き方を書くことができる。		
7	次の休暇のために、宿泊に関する情報を求める手紙を、ホテルに書くことができる。		
8	一般的なオフィス機器の使い方を示したメモを、友達に書くことができる。(コピー機・ファックス)		
9	授業を休む理由を説明したメモを、先生に書くことができる。		
10	就職活動で、自己紹介と資格を記した手紙を、書くことができる。		
11	プロジェクトや課題の進捗に関するメモを、先生に書くことができる。		
12	最近購入した家電について、店長に苦情を書くことができる。		
13	自分の学校の専攻や設備について、入学を希望しそうな人に、手紙を書くことができる。		
14	自分の参加したプロジェクトに関して5ページの正式なレポートを書くことができる。		
15	自分の出席した授業の要点を書くことができる。		

資料 3：英語学習・使用ログ

英語学習・使用の記録

夏休み中に、英語学習もしくは英語の使用の記録を以下の要領でつけてください。

1. 連続した2週間分（それよりも長くても構いません）の記録をつける。その際、何に焦点を当てるのかを自分で決め、下の記録のタイトルとする。（例：TOEIC教材を使つての勉強、海外インターンシップもしくは国内インターンシップでの英語の使用）
2. 日にち、具体的な学習、使用場面（例：「英語で自分の専攻の話をする」、「授業で使っている『新TOEIC TEST 英単語出るとこだけ!』のpp.20-25の単語を見直し」、「その後それに付随した問題を解く」、など）、学習、使用をしてみて気づいたこと、印象に残ったこと（自分は動詞の時制の問題に弱いのかも、単語の発音がわからないと聞き取れない、専攻のことを深く言おうとすると単語に詰まってしまう、あのとき～な感じで言えればよかったな、自分がわからなかった彼女が言っていた単語はこれだったのかなど）を書き留める。
3. 2週間分を紙媒体で後期最初の授業で提出していただきます。このプリントは、Xyθοςの「英語演習 I」フォルダ内の「課題など」というフォルダにあります。ご自分でダウンロードし、パソコンで入力し、プリントアウトしたものを提出してもらっても構いません。2週間分になるように適宜ページ数は増やしてもらって構いません。

記録日記タイトル：

専攻 _____ 番号 _____ 名前 _____

日にち	具体的な学習、使用場面	気づいたこと、印象に残ったこと

資料 4：事前研修の効果確認質問紙

日本人として英語を使うこと・異文化理解に関する授業内活動に関するアンケート

みなさんに授業中にやっていただいた上記の活動を、今後、東京高専からインターンシップへ行く後輩たちへより良い事前準備・事後学習を英語教員として提供するために調べています。授業内でお話したように、みなさんのご回答は、榎村真由の研究調査のデータとして使用させていただくことがあります。みなさんから集められたデータは、榎村真由の研究調査のためだけに使用され、この調査へご協力いただくみなさんに不利益を与えるものではありません。このアンケートへの回答と榎村への返却で、今回の調査への協力で同意していただいたと考えさせていただきます。ご協力ありがとうございます😊

専攻() 番号() 名前()

インターンシップ行先(国名・都市)： _____

インターンシップ受け入れ会社・機関： _____

以下の各文を読み、全くそう思わない場合には 1、そう思わない場合には 2、どちらとも言えない場合には 3、そう思う場合には 4、とてもそう思う場合には 5 を選び、各文の横の欄に○を付けてください。

1	英語を使用する人々、world Englishes の概念に関する講義と活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
2	文化の構成要素について考える授業での活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
3	異文化の人と文化の違いから起こる衝突が起こった際にとるべき行動について学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
4	カルチャーショックの段階とカルチャーショックへの対処法を学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5

海外インターンシップへ行った方へのアンケート

みなさんの英語や言語を習得する気持ちの変化、および今後、東京高専から海外インターンシップへ行く後輩たちへより良い事前準備を提供するために調べています。授業内でお話したように、みなさんのご回答は、榎村真由の研究調査のデータとして使用させていただくことがあります。みなさんから集められたデータは、榎村真由の研究調査のためだけに使用され、この調査へご協力いただくみなさんに不利益を与えるものではありません。このアンケートへの回答と榎村への返却で、今回の調査への協力で同意していただいたと考えさせていただきます。ご協力ありがとうございます😊

専攻() 番号() 名前()

インターンシップ行先(国名・都市)： _____

インターンシップ受け入れ会社・機関： _____

以下の各文を読み、全くそう思わない場合には 1、そう思わない場合には 2、どちらとも言えない場合には 3、そう思う場合には 4、とてもそう思う場合には 5 を選び、各文の横の欄に○を付けてください。

1	英語を使用する人々、world Englishes の概念に関する講義と活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
2	海外インターンシップ中、自分はカルチャーショックを経験した。	1	2	3	4	5
3	文化の構成要素について考える授業での活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
4	異文化の人と文化の違いから起こる衝突が起こった際にとるべき行動について学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
5	カルチャーショックの段階とカルチャーショックへの対処法を学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5

国内インターンシップへ行った方へのアンケート

みなさんの英語や言語を習得する気持ちの変化、および今後、東京高専からインターンシップへ行く後輩たちへより良い事前準備を提供するために調べています。授業内で話したように、みなさんのご回答は、櫻村真由の研究調査のデータとして使用させていただくことがあります。みなさんから集められたデータは、櫻村真由の研究調査のためだけに使用され、この調査へご協力いただくみなさんに不利益を与えるものではありません。このアンケートへの回答と櫻村へへの返却で、今回の調査への協力を同意していただいたと考えさせていただきます。ご協力ありがとうございます😊

専攻() 番号() 名前()

インターンシップ行先(都市): _____

インターンシップ受け入れ会社・機関: _____

以下の各文を読み、全くそう思わない場合には 1、そう思わない場合には 2、どちらとも言えない場合には 3、そう思う場合には 4、とてもそう思う場合には 5 を選び、各文の横の欄に○を付けてください。

1	英語を使用する人々、world Englishes の概念に関する講義と活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
2	インターンシップ中、自分はカルチャーショックを経験した。	1	2	3	4	5
3	文化の構成要素について考える授業での活動は、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
4	異文化の人と文化の違いから起こる衝突が起こった際にとるべき行動について学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5
5	カルチャーショックの段階とカルチャーショックへの対処法を学んだことは、自分がインターンシップに行く準備として役立ったと思う。	1	2	3	4	5

資料 5：授業アンケート 4 回目

授業アンケート 4 回目

来年度より良い授業を作っていくため、またみなさんが英語演習 I を履修し学習してどのような変化があったのかを見るために調べています。この 1 年の授業を振り返ってお答えください。授業内で話したように、みなさんのご回答は、櫻村真由の研究調査のデータとして使用させていただくことがあります。みなさんから集められたデータは、櫻村真由の研究調査のためだけに使用され、この調査へご協力いただくみなさんに不利益を与えるものではありません。このアンケートへの回答と櫻村へへの返却で、今回の調査への協力を同意していただいたと考えさせていただきます。ご協力ありがとうございます😊

専攻() 番号() 名前()

以下の各文を読み、全くそう思わない場合には 1、そう思わない場合には 2、どちらとも言えない場合には 3、そう思う場合には 4、とてもそう思う場合には 5 を選び、各文の横の欄に○を付けてください。

1	ポスタープレゼンテーションは英語の発話練習として行ってよかったと思う。	1	2	3	4	5
2	ポスタープレゼンテーションで自分以外の人の発表を聞くという活動は自分の英語学習に役立った。	1	2	3	4	5
3	ポスタープレゼンテーションの後、ラップアップとして行ったカルチャーショックや異文化についての話し合いのグループ活動は、自分が異文化理解を深める上で役に立ったと思う。	1	2	3	4	5
4	ポスタープレゼンテーション後、ラップアップとしてクラス全体で行った討論は、自分が異文化理解を深める上で役に立ったと思う。	1	2	3	4	5